

慣れ

慣れは惰性にもつながり、恐ろしいものです、なんでもが当たり前になり、深みを持つことができません。先日、オリンピックの開催地をめぐり、大騒ぎでした。テレビも新聞も、オリンピックの東京招致に、必死のようでした。そのことに、反対する意見は、ほとんど聞かれませんでした。いや思つても、テレビに出れなかつたり、反対する意見を書きたくても書けてなかつた現実があつたのかもしれません。そうして、そのようなものを、見聞きしている、私たちも、そのような世界に、どつぶりつかつてゐるのでしよう。本当に私たちが考え方をくしたちも、そのような世界に、どうふりつかつてゐるのでしよう。本当に私たちが考えていることを、主張しにくく、なつてゐるのかもしれません。

でいることを、主張しにくく、なつてゐるのかもしれません。大きな流れ、大きな体制、と言うよりも、そのような雰囲気に負けでいて、その空気なのかもしません。そうしてそれが当たり前となり、自らの頭で考え行動することが反逆のように自分で思つてしまします。空気に抵抗するのはバッシングを受けながらなのでしょう。この空気に抵抗するのは大変な勇気が伴います。

でもこのような世界から離れてみると、今まで気づかなかつた世界が、開かれます。

次のように、話を聞きました。

病院で、お婆さんが、重い末期ガンを患い、入院しております。医者も看護師も、痛がるお婆ちゃんにはほどんど、言葉を交わさないで、本人は一人苦しんでおりました。そこに見習いの若い、看護学生が、このおばあちゃんの介護につきました。看護学生は、どうしたらよいかわからず、途方にくれながら、ただ手を握り、背中をさすり、どんな言葉をかけて良いかもわからずに、お婆ちゃんの話す言葉を必死に聞き取ろうとしながら無言でただひたむきな、看護をしておりました。そのうちにおばあちゃんは、この若い看護学生に、心を開き、今までの長い人生の家族のこと、結婚の事、子供のこと、苦労して育てながらも、今はひとりで暮らしていることなど、そのようなことを話しているうちに、痛みの訴えが少なくなっています。看護学生は時々、「そうそれはよかつたですね」、などと、相槌を、打つだけです。ガンと腹水で、大きくなつたお腹をなでながら、初めて妊娠した時のように、少し動いたよ、などとうれしそうに話します。こうしてお婆さんは、最後を満足したように穏やかに亡くなりました。重い死を前に、深い悩みに、寄り添うというのは、技術論とか慰めの言葉ではあります。けれども、お婆さんは、最後を満足したように穏やかに亡くなっています。私たちは、勝手に、慣れが正しいことと錯覚しているのかもしれません。淨土真宗の聞法の心持ちの中に、第八代蓮如上人の言葉があります、「このたびのことは初事と思ふべし」「私一人のためと思ふべし」、「今生最後と思ふべし」とあります。現在は聞くことが難しい時代です、その反動として、慣れを要求されます、しかしなれば自分を見失います。本物を見抜くまなざしが求められます。私たちが見てゐるのは、その人自身ではなくその人の背中に背負つてゐるもの価値基準としているのかもしれません。それは地位であつたり経済力であつたり少し違うものを判断としているようですね。改めて人間としての原点が求められていると思ひますが。